声明「『即位礼』『大嘗祭』に際してのわたしたちの立場」

わたしたちキリスト者は、「神ならぬものを神としてはならない」との聖書の教えにしたがって、世の創り主なる神の前で、すべての命がひとしく愛を受け、尊重され、救いへと招かれていることを信じる者です。それゆえ、すべての人の人権が守られ、自由と平和のもとに生きられることを願い求め、そのために祈っています。

今回、天皇の代替わりに際して「即位礼正殿の儀」が公費負担によって行われました。また、「大嘗祭」が公費負担によって行われようとしています。「即位礼正殿の儀」は天皇が剣璽と共に高御座に載って即位を宣布する儀式です。「大嘗祭」は即位した天皇が神々と食事を共にして、神々と一体化することを示す宗教儀式です。これらの儀式はいずれも、大日本帝国憲法のもと、天皇を「現人神」として神格化し、その権威のもとに国民を統制する目的で作られ、行われました。

こうして神格化された天皇の権威のもとで、国はアジア諸地域を植民地と為し、侵略戦争を推し進めてゆきました。人々は戦争に動員され、天皇のために死ぬことが賛美されました、このことは世界の、とりわけアジア諸地域の人々に多大な苦しみを負わせることになりました。キリスト教も弾圧や抑圧を受けながら、やがて天皇の権威に服し、福音を歪めて戦争を是認し、天皇のために死ぬことを賛美し、それを国内やアジア諸地域に奨励する過ちを犯しました。また、天皇の神格化を巡って同じ日本基督教団に属するホーリネス系教派が弾圧を受けた時、これを見過ごしにし、切り捨てる過ちを犯しました。

敗戦後わたしたちは、この過ちに気づかされ、神に対してその責任を告白し、深い悔い改めをもって、国内外、ことにアジア諸地域の人々にゆるしを請いました。

このような苦しみを経てわたしたちはいま、民主主義、平和主義に立ち、政教分離を原則とし、信教の自由を保障する憲法を手にしています。このような日本のキリスト教の歴史を振り返るとき、わたしたちは天皇の事柄に関心を持たざるを得ません。

いま、天皇の代替わりに際して、天皇の神格化を含む諸行事・儀式が国の「公的行事」として公費負担のもとに行われていることに、わたしたちは深く憂慮します。それは、わたしたちが多大な犠牲を払って手にした民主主義、政教分離の原則、信教の自由に基づく憲法を冒し、社会を壊すものです。これによって国が再び天皇の権威と一体化し、そのもとに人々を統制し、動員し、国の政策のために人々の命を犠牲にしていくことを、わたしたちは危惧するのです。

わたしたちは、かつて教会が犯した過ちと、苦しみを省みて、あらためて福音に立ちかえり「見張りの務め」を果たすために、天皇代替わりの諸行事・儀式が、国によって公費負担のもとに「公的行事」として行われることに対して、声を挙げて「反対」の意志を表明します。

2019 年 11 月 5 日

日本基督教団東京教区北支区常任委員会